



幼な見

釧路 兎玉 昌彦

みどりごの言葉を覚える不思議さは母から子への息つぎリズム
片言がいつの間にもやら本物の会話になつて幼児の頭脳
心から心へ返すボールから言葉も歌も恋も涙も
子育ては農業に似て手かけつつ自力を引き出す根気と愛と
「バイ・バイ」を言わずに見つめる幼な見は別れの意味を分かっているらし

春、盛り

北広島 古屋雅三知

三寒と四温の日々を繰り返しいつしか山の雪も消えゆく
夕暮れて 渡り遅れし白鳥に餌を与うるひとのありけり
ムスカリの傍らに咲くクロツカス 小きき庭に光を浴びて
戯れし蝶々の如くひらひらとそよ風の間に桜花散る
野に山に咲き誇りたるたんぽぽも綿毛を飛ばし春は終わりぬ

二季草

函館 水関 清

春と初夏 踵接してやって来る 北の五月は目覚めの季節
春の青と夏の朱とを混ぜ合わせ 二季の狭間に咲く 紫の藤
水張ればどの実も光る銀の玉 弾むところで さあ梅仕事
目は笑い 口いっぱいにイチゴ食む おいしい顔はこんな顔なり
一目散 海へと急ぐ子亀らを 寄せ来る波はやさしく抱く

骨折

旭川 稲積 文子

宙を舞う瞬間地面にたたき落ち その場で動けず激痛走る
その痛さ咳もクシヤミも響くなり 耐える外なし救急車の中
何も彼も他人まかせの入院は 患者の立場も理解は遠し
人工関節を体の中にうめられて ようやく痛みも取れ始めたり
他人より恢復が早いとほめられて 退院を待つ食慾のなきひる

庭

江別 三宅 浩次

華やかに咲き誇りたる牡丹花は散るときを知り音も立てず
北国の一斉に花咲く六月はうるわしのときやすらぎのとき
紫陽花の雨に匂う紫に心休める庭の片隅
実生から育てたという黒船の苗を植えてすでに五十年
日の陰で延齡草の咲く庭を心の隅で誇りと思う

エゾシヤクナゲ

札幌 浜島 泉

バス降りて幾停留所すぎ歩く エゾシヤクナゲの春芽に日差し
新聞に群衆の写真のあくる日の夕餉 「ニシンを焼きました」と妻
四つ昔死亡診断 このたびは巡り合はせてその娘逝く
上空に冷気襲来 畑から霧の嵐の立ちて昇りて
常緑とコブシ桜と春紅葉 パッチワークに山を染め分く